

# 土鈴成形方法に関する一考察

## ——「タタラ作りと玉作りによる土鈴制作から」——

本 田 郁 子

摘要：幼児・児童を対象とした焼き物制作には様々な作品があるが、土鈴は焼き物独特の音色が楽しめる作品であると考えられる。しかしながら、土鈴の制作は幼児・児童が自身の力のみで成形する場合、やや難しい工程があると考えられる。そこで、本研究では、幼児教育を学ぶ学生を対象に、タタラ作り、玉作りによる二通りの成形方法で土鈴の制作を行い、それぞれの成形方法の長所・短所、特性を明らかにし、より成形し易い方法を開発する為の視点を得ることを目的とした。実践後の学生のアンケート、筆者の観察記録、完成作品から考察し、それぞれの成形方法における長所、短所、特性を具体的に示すことができた。今後は、今回得た視点を学生に提示し、制作をとおして「改善方法」や「より成形し易い方法」を共に探り、開発したいと考える。

キーワード：粘土 焼き物 土鈴 タタラ作り 玉作り

### はじめに

土粘土は可塑性を持ち、水分量によって状態が多様に変化すると共に、焼成することにより耐久性を得ることができる造形素材である。幼児・児童を対象とした焼き物の制作には様々な作品があるが、土鈴は振ると焼き物独特の音色を楽しめる作品である。土鈴とは外殻に中玉が入った焼き物である。幼児・児童が自身の力のみで成形する上で、皿や茶碗のような器形と比べると、土鈴は中の空間を確保しながら口を閉じる必要がある。一般的に、幼児・児童を対象とした指導書では、タタラ作りによる土鈴の成形方法が紹介されているが、この成形方法は幼児・児童にとってやや難しい工程があると考えられる。筆者はこれまで幼児・児童にとって、より作り易い土鈴の成形方法を探る為、様々な成形方法で土鈴の試作を行ってきた。その中から、現時点で良いと思われる二つの成形方法、一般的なタタラ作りと、筆者の考案する玉作りを応用した成形方法を取り上げ、担当する授業において、2年生を対象とした「保育内容演習Ⅱ（表現）」ではタタラ作り、1年生を対象とした「陶芸入門」では玉作りと、異なる二通りの成形方法で学生に土鈴の制

作方法を指導し成形をさせたが、どちらの成形方法にも一長一短があると感じた。そこで、同じ対象者に二通りの成形方法で土鈴の成形を行い、比較することにより、それぞれの成形方法の長所、短所、特性が明らかになるのではないかと考えた。

## 1. 研究の目的

幼児・児童にとって、より成形し易い土鈴の成形方法を探る予備研究として、保育者・教育者を目指す学生を対象に二通りの土鈴成形方法を比較する実践を行なう。学生の実践を通して、タタラ作りと玉作り、それぞれの成形方法の長所、短所、特性はどこにあるのかを具体化し、より成形し易い方法を開発する為の視点を得ることを目的とする。

## 2. 成形方法について

土鈴の歴史は古く、縄文時代に遡る<sup>(1)</sup>。現在、土鈴は量産を目的とするならば型を用いて鑄込み・張り込み成形が主流である。陶芸体験を目的とする場合は、タタラ作りや玉作りが用いられることが多い。幼児・児童を対象とした造形指導書<sup>(2)</sup><sup>(3)</sup><sup>(4)</sup><sup>(5)</sup>では、タタラ作りによる土鈴制作方法が紹介されている。他の技法としては、玉作りの貼合わせ、型作りの貼合わせによる成形方法<sup>(6)</sup><sup>(7)</sup>が報告・紹介されている。貼合わせ技法は接着部分に亀裂が入る可能性があり、タタラ作りに比べてやや難易度が高いと考え、本研究ではタタラ作りと筆者の考案した玉作りによる土鈴の成形方法を比較した。本研究で実践したタタラ作りと玉作りの成形方法を以下に説明する。

### (1) タタラ作り

タタラ作りは、中玉を包んだ新聞紙をボール状に丸め、更にタタラ（板状にの伸ばした粘土を指す）で新聞紙玉を包む成形方法である。以下に材料、道具、成形方法を示す。

- ・材料・・・粘土（常滑山土）100g 新聞紙1／8枚
- ・道具・・・タタラ板（5mm）2本 伸ばし棒1本 粘土板1枚 ストロー 剣先
- ・手順

- ① 少量の粘土を丸め、直径10mm程の中玉を作る。
- ② 一度皺を付けた新聞紙で中玉を包み丸く整える。粘土は乾燥すると収縮するので新聞紙を柔らかく丸めることが重要である。
- ③ 粘土玉の両端にタタラ板を置き、伸ばし棒で粘土玉を伸ばし5mmのタタラを作る。途中、粘土玉が粘土板に貼りつかないように裏返し再度伸ばす。
- ④ 丸めた新聞紙にタタラを被せ、少しずつ口を寄せて閉じる。重なった余分な粘土を取りながら丸く整え、紐を通す為のつまみを作る。
- ⑤ 少し乾いたら長さ40mm、幅5mm程の切れ込みを作る。ストローで両端に穴を空けてから、剣先で切り込みを入れていくと両端の亀裂を防ぐことができる。
- ⑥ つまみにストローで穴を空ける。バリを指で整えて成形終了。

### (2) 玉作り

玉状の粘土を器形に伸ばし、中玉を入れ、口を徳利のように絞りながら閉じ成形する。以下に材料、道具、成形方法を示す。

・材料・・・粘土（常滑山土） 100g 新聞紙少量

・道具・・・ストロー 剣先

・手順

- ① 少量の粘土を丸め、直径10mm程の中玉を作る。
- ② 外殻との貼り付き防止の為、少量の新聞紙で中玉を包む。
- ③ 残りの粘土を丸め掌に載せて、もう片方の親指で粘土の中心に底が5mm程の厚みになるよう穴を空けていく。
- ④ 粘土を内側から親指、外側から残りの4本の指で挟み底から上へ螺旋を描くように徐々に粘土を伸ばしながら深めのぐい呑みのような器形を作る。
- ⑤ 中玉を入れて、人差し指と親指で少しずつ口を寄せて閉じ、紐を通す為のつまみを作る。以下タタラ作りの⑤⑥と同じ工程を行う。

それぞれの成形方法で制作した土鈴は同様に以下の工程を経て完成させる。1週間程かけて自然乾燥させた後、焼成窯で最高温度約800度、約8時間かけて素焼きする。中玉を包んだ新聞紙は焼成後灰になるので、切れ込みから取り出す。アクリル絵の具で彩色を施す。

### 3. 研究の方法

#### (1) 対象

本学子ども学科専門教育科目である「保育内容演習表現（表現）Ⅱ」を受講する2・3年生を含む35名が対象である。

#### (2) 実施内容

全15回の授業の内、土鈴の制作を2回に渡って行った(写真1)。1回目の主な活動内容は「成形」で同じ形・大きさの土鈴を目標に2つの成形方法「タタラ作り」と「玉作り」で各1個ずつ土鈴を制作した。2回目の活動内容は「彩色」で素焼き後の作品にアクリル絵の具を塗った。完成した作品が(写真2)である。左が玉作り、右がタタラ作りによる作品である。



写真1 制作風景（成形）



写真2 玉作り(左) タタラ作り(右)

### (3) 分析方法

対象学生35名にアンケートを行った。1回目の授業後に成形についてアンケート記入、2回目授業後に完成作品、感想について記入してもらった。

## 4. 結果と分析

アンケートにより学生35名中32名から回答が得られた。アンケート自由記述は学生の表記通り記した。アンケートの結果と、筆者の活動観察記録、完成作品と合わせて、土鈴の成形方法について分析した。

### (1) タタラ作りについて

タタラ作りについて、難易度を尋ねた結果が(表1)である。この結果一番多かった回答「やや難しい」「どちらでもない」が同数で、合計すると24名である。多くの学生は簡単ではないが、難しすぎることはないと感じたようである。

表1 タタラ作り難易度結果

質問	タタラ作りで制作してどうだったか。				
難易度	簡単	やや簡単	どちらでもない	やや難しい	難しい
人数	1名	5名	12名	12名	2名

次に、タタラ作りの自由記述について①簡単、②どちらでもない、③難しい、④その他に分類し(表2)に示した。タタラ作りにおいて「①簡単」と感じた記述に、粘土を板状に伸ばす作業がある。学生の成形時の様子からは、特に問題なく短時間で作業を終えていた。タタラ板と延ばし棒を用いることにより、粘土を均一な厚さに伸ばすことが可能であるので、簡単だと感じたのではないかと推察する。全体において「①簡単」の記述の占める割合は少なく、「③難しい」という記述が多い。記述内容から、学生が苦心していたのは、新聞紙玉を更に粘土で包む際に、上半部を粘土で包み口を閉じる工程であることが分かる。学生の成形時の様子からも、板状の粘土を球形に包み込む時に上半部に大きな皺が寄り、厚みが不均一になり、丸く整えるのに手間取っていた。上手く口を閉じることのできない学生には、新聞紙玉に掌で少しずつタタラを沿わせ、粘土が重なり厚くなった余分な粘土を取りながら丸く整えるように指導した。

表2 タタラ作りの記述

質問	タタラ作りの感想を自由に記述しなさい。
①簡単 (6名)	<p>〈全体の工程〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・比較的スムーズにできました。 ・作りやすかったです</li> </ul> <p>〈粘土を板状に伸ばす工程〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・のばすだけだから簡単だった ・麺棒で延ばしてあるのであんがい簡単だったなと思いました。</li> </ul>

〈玉作りとの比較〉

- ・玉作りに比べて形を作るのが少し簡単に感じた ・玉作りよりは作りやすかったです。

②どちらでもない (2名)

〈複数の工程〉

- ・粘土を広げていくのも難しく、つつむのも難しかったけど、形は整え易かったです。
- ・つつむのは少し簡単だったけど、のばすときに丸にするのが難しかったです。

③難しい (18名)

〈全体の工程〉

- ・作るのが難しいと思った。 ・つくるのがひじょうにむずかった

〈板状に伸ばす工程〉

- ・粘土を広げていくのがむずかしくて、玉を包むのもむずかしかったです。

〈新聞紙玉を包む工程〉

- ・新聞のまわりをやさしく粘土でおおうのが難しかった
- ・中の新聞をきつくしすぎないようにするのが難しかった
- ・新聞紙と一緒に包むのが難しかったです。
- ・のばしてから中に玉を入れる時下がうすすぎて穴があいちゃったりしてむずかしかった。
- ・だんだん上につつんでいくのが難しかったです。
- ・どんどんうすくしていく加減が難しかった。
- ・均一に伸ばして更につつむのが難しかったです。
- ・包むのは難しかったけど楽しんで製作することが出来た。

〈閉じる工程について〉

- ・広げたところから包み込むのは簡単だったけど、最後のキュッとするのが大変でした。
- ・のばした状態から上でくっつけるのが難しかったです。新聞紙を丸めて入れるのがいっばで入れにくかったです。

〈形について〉

- ・丸くするのが一番難しかった ・丸がうまく作れなかった
- ・形を整えるのが難しかった ・少し四角っぽくなってしまったので残念でした。

〈その他〉

- ・どちらにも言えることだけど中の空洞の大きさの調整が難しかった。

④その他 (6名)

〈工程について〉

- ・新聞を丸めるのが柔らかくするのが大事だと思いました。

・形が巧く作れなくて小さくなってしまいましたが、悪くはない形なのでいいかなと思いました。

・土を伸ばしおわってから新聞紙をつつむ時に、土を裏返しにしてつつむのを忘れてしまって表面がざらざらになってしまいました。

〈体験についての感想〉

・楽しかった ・良かった ・特にない

## (2) 玉作り

玉作りについて、難易度を尋ねた結果が(表3)である。この結果一番多かった回答は「やや難しい」で16名である。タタラ作り「やや難しい」12名(表1)と比較すると多い結果となった。「やや簡単」は7名であった。よって、「やや難しい」と感じる学生が半数を占める一方で「やや簡単」と感じる学生も一定数を占めている。

表3 玉作り難易度結果

質問	玉作りで制作してみてどうだったか。				
難易度	簡単	やや簡単	どちらでもない	やや難しい	難しい
人数	1名	7名	5名	16名	3名

次に、玉作りの自由記述について①簡単、②難しい、③その他に分類し(表4)に示した。学生の制作時の様子も合わせて、全体・各工程についてどのように感じたのかを分析した。玉作りの記述においては、「①簡単」という記述がタタラ作りより多く見られた。その理由として、玉作りでの経験があり技法に慣れている、口の部分が広がっていないので閉じやすいといった記述がみられる。「②難しい」という記述において、粘土を器形に伸ばす工程が最も多く見られ、粘土を指先の感覚で同じ厚みに伸ばすことや器の口が広がらないように伸ばすことに難しさを感じているようであった。閉じる(包む)工程についての記述はタタラ作りの記述と比較して少ない。器形になった状態からは比較的容易に閉じることが出来たと推察できる。しかし、粘土を器形に伸ばすことができず、皿形に伸びてしまった学生は、タタラ作り同様に口を閉じる作業に手間取っている様子であった。上手く閉じられない学生には、タタラ作りと同様に少しずつ口に皺を寄せて縮めるよう指導した。

表4 玉作りの記述

質問	玉作りの感想を自由に記述しなさい。
①簡単(7名)	<p>〈全体の工程〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1年の時に陶芸で作ったので簡単にできました。前よりもきれいにできたかなと思います。</li> <li>・前に一度作ったことがあったのでわりと簡単にできました。</li> </ul> <p>〈タタラ作りとの比較〉</p>

- ・タタラ作りに比べてやりやすかった
- ・タタラ作りよりかは簡単でした。
- ・タタラよりも作りやすかったです。
- ・タタラ作りよりは作りやすく新聞紙も小さくちぎって丸めるだけだったので包みやすかったです。
- ・タタラ作りよりは作りやすく、最後の部分も全体的に広がっているわけではないので形を整えやすかったです。

②難しい (21名)

〈全体の工程〉

- ・難しかった
- ・つくるのがむずかしかった
- ・作るのが難しいと思った。
- ・キレイにできなかった
- ・自分の手で広げていくのがすごく難しかったです。つつんでいくのもうまくいかなくて、形がすぐくずれてしまって大変でした。

〈粘土を器形に伸ばす工程〉

- ・下に穴があいてしまってむずかしかった
- ・指で底に掘っていく作業が難しかったです。
- ・厚さの調節も難しくても上も下も同じ厚さにするのが難しかった。
- ・指の感覚だけで、うすく調整することが難しかったがとても楽しく、頑張って作れた。
- ・伸ばす力が強くちぎれたりするので力かげんが難しかったです。
- ・人差し指と親指を巧みに使う点が難しいと感じました。
- ・のぼして上にするのが難しかった。タタラ作りよりやりにくかった
- ・一度作ったことがあるので作れましたが、広がってしまうので難しいと思いました。
- ・穴をあけるにあまり広げないようにするのがむづかしいなと思いました。

〈包む・閉じる工程〉

- ・ギョウザみたいにつつむのが難しかったのと、お茶碗のやり方でつつむのが難しかったです。
- ・最後がつつめなくて何度もやり直した。
- ・口を閉じるところが難しくほとんどムリやりになってしまったので残念

〈形について〉

- ・丸の形にするのが難しかったです。そこが悔しかったです。
- ・丸がうまく作れなかった

〈その他〉

- ・上のでっぱりを作るのがむずかしかった
- ・思ったより小さくなり、中の空洞が大きくないせいかあまりいい音が鳴らなかった。

③その他 (3名)

〈作品について〉

- ・ギョウザみたいな形が出来た。

〈体験についての感想〉

- ・楽しかった
- ・良かった

### (3) 成形方法の比較

成形方法の比較結果(表5)によると、タタラ作りの方が作り易いとした学生は20名、玉作りの方が作り易いとした学生は12名という結果となった。作り易いと感じた理由「①簡単」(表4)の記述の中に、過去の経験が今回の作り易さに影響をしたとみられる記述がみられる。そこで、過去の制作経験との関連性をみると、土鈴制作経験がある学生は11名(表6)で、成形方法は(表7)の示すように玉作り9名、タタラ作り2名であった。その内「過去に経験のある成形方法」と「今回作り易かった成形方法」が一致しているのは(表8)によると6名である。一方、一致していない学生は5名である。二つの成形方法の作り易さの比較について、過去の制作経験の有無による関連性があるとはいえず、経験だけでなく、個々の成形方法の好みもあるのではないかと推察する。

表5 成形方法の比較結果

質問	どちらの成形方法が作り易かったか。		
成形方法	玉作り	どちらでもない	タタラ作り
人数	12名	0名	20名

(表6)土鈴制作経験結果

質問	土鈴を作ったことがあるか。	
経験	ある	なし
人数	11名	21名

表7 経験のある成形方法結果

質問	作ったことがあると方はどの成形方法ですか。		
成形方法	玉作り	タタラ作り	その他
人数	9名	2名	0名

表8 制作経験との関連性

経験のある成形方法	玉作り (9名)		タタラ作り (2名)	
今回成形し易かった方法	玉作り	タタラ作り	タタラ作り	玉作り
人数	4名	5名	2名	0名

### (4) 仕上がり

素焼き後の作品について、仕上がりについてのアンケート結果(表9)はタタラ作りが良いと



## 土鈴成形方法の一考察

したのは16名、玉作り11名である。焼成後の作品は、タタラ作りでは同じぐらいの大きさに仕上がっていた。一方、玉作りではタタラ作りよりも大きいものや小さいものなど、大きさに差が見られた。直径および重量の平均値(表10)は共にタタラ作りの方が高い。この結果より平均的にはタタラ作りの方が粘土を有効に使用し、薄く、大きく成形されていることが分かる。粘土の厚みを切れ込みから観察すると、タタラ作りの作品はどれも同じぐらいの厚みに仕上がっている。一方、玉作りではタタラ作りよりも厚みが薄い、同じぐらい、厚い、または不均一に仕上がっていた。

表9 仕上がりに関する結果

質問	仕上がりが良いのはどちらの成形方法か。			
成形方法	玉作り	どちらでもない	タタラ作り	未回答
人数	11名	4名	16名	1名

(表10) 焼成後の直径と重量の平均値(小数点第2位以下切り捨て)

成形方法	タタラ作り	玉作り
直径 平均値	52 mm	48 mm
重量 平均値	72 g	68 g

### (5) 音色について

音色について(表11)はタタラ作りが良いとしたのは20名、玉作り6名でタタラ作りの方が多い。これは、タタラ作りの方が粘土を薄く伸ばすことができた結果、中の空間が大きくなり音色にも影響したと考えられる。

表11 音色に関する結果

質問	音色がよいのはどちらの成形方法か。			
成形方法	玉作り	どちらでもない	タタラ作り	未回答
人数	6名	3名	20名	3名

### (6) 土鈴制作を終えて

土鈴制作について感想を自由に記述してもらい、学生の感じた事や印象に残ったことを「①楽しい・嬉しい・良かった」、「②難しかった」、「③その他」に分類し(表12)に示した。①では土鈴制作・成形・彩色・粘土の特性・音について20名、②では土鈴制作・成形・彩色・粘土の特性・作品について9名、③では土鈴制作・成形について3名の記述が見られた。①の感想が最も多く「成形は難しかったが時間をかけて制作することにより作品への愛着や達成感を感じる」との記述がみられる。②においては粘土の特性・成形に関する記述が多く、一連の土鈴制作では彩色は簡単だったが、成形が難しいと感じたことが推察できる。また、粘土の特

性に気づいた学生もいることがわかる。今回の学生の記述からは、「成形は難しいが楽しかった」「もう一度作りたい」「作品に愛着が沸いた」等肯定的な意見が多かった。学生からは成型後「何時焼けるのか」、作品彩色後には「早く持ち帰りたい」などの声が聞かれた。土鈴制作において成形がやや難しいからこそ集中し、時間をかけて制作したからこそ達成感や作品への愛着が沸いたのではないかと推察する。

表 12 土鈴制作の記述

質問	土鈴制作の感想を自由に記述しなさい。
<p>①楽しい・嬉しい・良かった (20名)</p> <p>〈土鈴制作 (成形～完成) 全般について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しかった    ・集中できて楽しかった    ・土鈴をはじめて作ってみて楽しかった</li> <li>・なかなか体験したことがなかったので楽しかったです。</li> <li>・とても楽しく制作することが出来たので、ぜひまた作りたい。もっとキレイにやりたかった。</li> <li>・思ったより簡単に作れて楽しかったです。今度作る時があったらもっと丁寧に作りたいです。</li> <li>・粘土の状態から作って音色を聞きすぐ達成感がありました。楽しく作ることができました。</li> <li>・初めてやってみて出来上がりがすごく楽しみです。もう一回作ってみたいと思いました。</li> <li>・作るの難しかったけど、完成したらなんかうれしかった。</li> <li>・技能的には壊滅的うまく出来なかったけど土鈴制作はより好きになりました。</li> </ul> <p>〈成形について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・両方とも大変だったけど1年の時に玉作りで作ったことがあるから玉作りの方が楽しかった。</li> <li>・1年生の時にも作ったので、作り易かったです。前よりは楽しく作ることができました。</li> </ul> <p>〈彩色について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・色ぬりたのしかった    ・色ぬり上手にいったよかった</li> </ul> <p>〈粘土の特性〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・土をさわるのは気持ち良かった。</li> </ul> <p>〈音について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2つとも穴を大きく空けてしまって玉がおちないか音がどうなるか不安でしたが落ちずに済み、音もキレイな高い音で良かったです。</li> <li>・音が鳴るか心配だったけどけっこういい音が鳴ったので良かったです。</li> </ul> <p>〈作品について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・完成まで時間がかかった分愛着がわいた気がする。</li> <li>・時間をかけて作った土鈴に愛着が沸いてきました。焼いた後がとても楽しみです。</li> </ul>	
<p>②難しかった (9名)</p> <p>〈土鈴制作 (成形～完成) 全般について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・むずかしかった。    ・作品にするのがひじょうにむずかしい</li> </ul>	

〈粘土の特性〉

- ・粘土のあつかい方って難しいなと思いました。
- ・初めて作ってみて粘土で作ると時間が早くやらないと乾燥してしまうので難しかったです。

〈成形について〉

- ・広げて中身を入れたあとに包むのがとっても難しかったです。底に穴を空けた時もなかなかうまくいかなかったです
- ・鈴をキレイな形にするのが難しかったです。 ・丸くするのはむずかしい。
- ・思っていた形に作るのが難しかったです。 ・形を作るのが難しかった。

③その他（3名）

- ・ 作り方に2種類もあって驚きました。 ・過去に土鈴を制作していなかったのでしませんでした。
- ・ ありがとうございます。

## 5. 考察

タタラ作りの長所は、タタラ板と延ばし棒を用いることにより、均一の厚みのタタラを得ることができるので、下半分は均一な厚みに成形できることにある。短所としては、新聞紙玉をタタラで包む際に、上半部に大きく皺が寄り、口辺の厚みが不均一になることと、口が閉じにくいことである。一方、玉作りの長所は、器形に粘土を伸ばしてから口を閉じる為、タタラ作りと比較すると上半部に皺が入りにくいことにある。短所としては、粘土を指先で挟んで器形に伸ばしていくので、粘土を均一の厚みで広がらないように伸ばすことが難しく、厚みと形状において個人差が出てくることにあると考える。

粘土の厚みについて両者を比較すると、タタラ作りは玉作りよりも均一の厚みに伸び個人差が少ないことが特性で、玉作りはタタラ作りよりも厚くなったり、薄くなったり個人差が大きいことに特性がある。タタラ作りよりも玉作の方が薄く、整った球形の作品に成形できた学生が数名いることから、玉作りはタタラ作りよりも薄く、整った形を作る可能性を持った成形方法であるとも考えられる。

次に、口の閉じ易さについて両者を比較してみると、板状から閉じるタタラ作りよりも、器形から閉じる玉作りの方が簡単であると考え。しかしこれは、玉作りにおいて口が窄んだ器形に伸ばすことが前提であり、器形に作ることでできず皿形に開いてしまった場合は、タタラ作りと玉作りの口を閉じ易さは大差ないと言える。学生の成形時の様子からは、粘土玉の口を広げすぎないように器形に伸ばす作業には個人差が見られた。よって、タタラ作りは個人差が出にくい成形方法であり、玉作りは個人差が出やすい成形方法であると考え。

今回のアンケートにおいて、玉作りが成形し易いと感じた学生に対して、タタラ作りが成形し易いと感じた学生の方がやや多い結果となった。しかし、今回の対象者数だけではタタラ作りの方が玉作りよりも作り易いと断定はできない。タタラ作りと玉作りの作り易さについて学生の意見が分かれた理由としては、粘土を指先で均一の厚みの器形に伸ばすことが出来た学生は、口の

閉じやすさから玉作りが作り易いと感じ、一方、玉作りにおいて均一の厚み、器形に伸ばすことが難しいと感じた学生は、道具を用いて粘土を均一の厚みに伸ばせるタタラ作りの方が作り易いと感じたのではないかと推察する。作り易いと感じる成形方法には個人差があるので、個々に合った制作方法を提示することも有効であると考え。

今後のタタラ作りの改善点としては、タタラの包み方を工夫することにある。例えば新聞紙玉をタタラで筒状に巻いて両端を閉じる、2枚のタタラで半分ずつ包む等が挙げられる。閉じる工程が改善されれば、誰にでも作り易い成形方法になり得るのではないかと考える。玉作りの今後の改善点としては、指先で均一の厚みに伸ばす感覚と、口が広がらないように伸ばす感覚を養うような段階的な制作を行うことが有効ではないかと考える。例えば、成形前に5mm程に伸ばした粘土を指で挟ませて厚みの感覚を養うことや、土鈴作りの前に器形の作品（ぐい呑みのような小型の器）制作を行い、その後に土鈴制作を行うなど段階を踏んで制作を行えば、厚み、口の広がり等の個人差が改善され、完成度の高い成形方法となり得るのではないかと考える。

## 6. おわりに

本研究では、土鈴制作において二つの成形方法の比較を試みた。その結果、タタラ作りと玉作りの長所、短所、特性が明らかになり、より成形し易い方法を開発する為の視点を得ることが出来た。今後の課題としては、これらの視点を学生に示し、実践を通して成形方法を改善することにある。学生アンケートによる「土鈴制作の感想には、土鈴制作はやや難しいが楽しい造形活動であるという意見が見られた。学生と同様、幼児や児童にも焼き物ならではの音色や、作品完成の達成感を味わってもらいたいと考える。その為には、より作り易い土鈴成形方法の開発を今後も試みたい。

### (参考文献)

- (1) 笠原潔 (2006) 「楽器の考古学」日本音響学会誌 62 巻 8 号 p p.596-597
- (2) 榎栄子 (2008) 「保育をひらく造形表現」 p.40
- (3) あいち幼児造形研究会 (2010) 「子どもの表現力をグングン引き出す造形活動ハンドブック」 p.55
- (4) 村木朝司 (1996) 子どもが楽しむ造形スクランプル④ねん土・土 p p.94-95
- (5) 辻康秀 (2012) 造形教育の教材と授業づくり p p.140-141
- (6) 山梨県立考古博物館チャレンジ博物館第 9 回「干支の土鈴を作ろう開催レポート」  
<http://www.pref.yamanashi.jp/kouko-hak/h22event/h22cha-09repo.html> 2017/9/1 閲覧
- (7) 山田卓三 (1990) 「ふるさとも感じるあそび事典」 p p.232-237

(名古屋経営短期大学子ども学科 講師 本田郁子)